「愛した日々に悔いはない　Kiss today goodbye」

小林多喜二・青年　小林多喜二役・進行朗読の青年を一人の役者が演じる。

作　菅野彰

上演時間　一時間

理想上演日　二月二十日・多喜二祭

衣装　白いシャツ、黒いスラックス等、シンプルなもの。

●小林多喜二、そして現代から物語る人物としての青年を、全て一人の役者が演じる。

手元に台本を持ち、多喜二であるときと、青年本人であるときを、意識して分ける。

多喜二は溌剌と、青年は淡々と進行する。

●舞台上には、後方に上れる低い段が一つ。膝丈程の高さの台。

進行時の青年と、小林多喜二であるときの差違を、わかりやすく表現するための台。

前方上手寄りに、シンプルな机と椅子。

下手寄りに、ピアノ。

常にピアノ奏者がピアノ前に座している。

●開幕●

青年、舞台奥上段にて、唱歌『冬景色』を歌唱。

青年「小林多喜二が育った、北海道、小樽の冬はとても寒い。多喜二は明治四十一年、四歳で小樽区若竹町に一家で移り住んだ。

(『北海道の「俊寛」』小林多喜二著の朗読・進行と朗読の差違をはっきりとさせる)

十一月の半ば過ぎると、もう北海道には雪が降る。私は北海道にいる。乾い

た、細かい、ギリギリと寒い雪だ。夏の間彼等は棒頭にたたきのめされながら「北海道拓殖のために！」山を崩した。熊のいる原始林を伐り開いて鉄道を敷設した。だが、雪が降ると、それ等の仕事が出来なくなる。彼等は用がなくなるのだ。そうなると、汽車賃もくれないで、オツぽり出される。小樽や函館へ出てくるのはこういう人達なのだ。
北海道の冬は暗いのだ。（朗読終わり）
『北海道の「俊寛」』小林多喜二著作より、抜粋。
（主題の一つなので、印象的に）多喜二の見つめた北海道、小樽は、寒かったのだろうか？　暗かったのだろうか？」

青年、上段から舞台前方に降りる。
多喜二への変化。明るさと抑揚。

小林多喜二「（明るく切り替える）プロレタリア文学の旗手として『蟹工船』が有名な俺だが、実のところうちは貧乏ではなかった。
母、セキは俺の死後、『なんだ。小林多喜二の家は貧乏じゃないじゃないか』と言われて悔しがったようだが、実際、貧乏というのは我が家のような暮らしのことを言わない。
（おどけて、目の前にいる母に右手を挙げて謝る）ごめん！　母さん」

そのまま、愛おしく母を見つめて佇む多喜二。

多喜二「母はやさしい人だった。
母は賢い人だった。
母は聡い人だった。
（並べたどの言葉も母に当て嵌まらないと感じて苦笑）
……何か、ピンとこない」

多喜二「（客席に向き直り、母を見つめるまなざしからもとの溌剌さに切り替える）
確かにうちは元々は秋田のどん百姓で、母さんは、俺が生きている間は字が読めなかった。
だが父さんはとにかく書を好み、山師、おっともとい。北海道で成功した伯父に一家で呼びよせてもらってからは、姉も妹も弟も俺も、学校に通わせてもらった。
俺は今でいう大学に当たる、小樽高等商業学校まで出た。

弟の三吾は……（三吾の話は後のお楽しみに、という笑顔で）いや、この話はまた後で。
食うにはそんなに困らず、教育を受けて。
何より俺たち兄弟には、たとえ字が読めなくてもきちんと正しさを知っている母さんと、物事の理を見極める父さんがいた。
貧乏というのは」

ふと、子どもの頃に見た、若竹町の飯場（はんば）、タコ部屋のタコたちを見つめるように、立ち尽くす多喜二。

多喜二「貧乏というのは、まず貧乏という言葉を知る暇もないくらい悲惨なものだ。俺が見てきた明治末期、大正昭和の光景は、そういうものだった。
若竹町では港が作られていて、飯場にはタコと呼ばれる人夫たちが働いていた。貧しい農村の百姓が斡旋屋に借金をして、半ば騙されて出稼ぎに来た。
文字通り死ぬほど、働かされる。事故が起きてダイナマイトで吹っ飛んでも、弔われもせずまとめて穴に埋められたなんて話も聞いたことがある。
自分で自分の足を食うような暮らしだから、人夫たちはタコと呼ばれた。
病んで働けなくても、逃げても折檻されて、そうしてタコが死んでも誰に知らされることもない。
死んでも、誰も気づかない。
貧乏というのは、そういうものだ。
そしてその頃貧乏は、そこら中に溢れかえっていた」

まだ「その頃」を見つめている多喜二。

多喜二「うちは貧乏じゃあ、なかった。
ならなんで多喜二はそうまでしたと、人は言うかもしれない。俺も思う。死ぬまで殴られて働かされる人を見て、叫び声を聞いて、どうして俺はそっちを見つめてしまったんだろう」

若竹町の記憶から戻って、明るく溌剌とする。

多喜二「（明るく、がらっと変わる。楽しげに）
いや、全く違うものを見ていた時間もたくさんたくさんあった。
絵が好きだった。見るのも描くのも好きだった。だが描くのは……学資を出してくれている伯父に止められて、それで文学に傾倒した。

（苦笑）伯父も後悔したかもしれないな。絵を描かせておけばよかったと。
だがまあ、どの道を通っても俺は、同じ場所に還ったようにも思う。
どの道を通っても、文学に出会い、音楽を愛した。
（大きく高揚して）我慢できない自慢なので、もう言っていいか!? 俺は商業学校を卒業して銀行に就職したその初任給の半分を使って、弟の三吾にバイオリンを買ってやったんだ！」

ピアノ曲（ショパンなどを中心に。これらの楽曲については、改めて相談）

多喜二「三吾は六つ下のかわいい弟だ。俺たちはみんな学校に行かせてもらったが、上の学校まで行けたのは長男坊の俺だけだった。そういうことは、まあ、当時は普通のことだった。三吾は小学校を出ただけで、伯父の三ツ星パン屋で働いていた。
（愛おしげに）三吾はおとなしくて、やさしい弟だ。
子どもの頃から音楽が好きで、唱歌を歌ったり、借り物のハーモニカで曲を奏でたり。
才能があった！
（少し照れて）兄バカじゃない。本当なんだ。それが証拠に、三吾は先生が弾いているバイオリンの音があんまりきれいなもんだから、じーっとその手を見て、なんと必死で見て覚えて、その先生が貸してくれたバイオリンで『サクラ　サクラ』を一曲弾いたんだ。すごいだろう？
父さんが中古のバイオリンを買ってやろうとしたけど、高くて手が出なかったと母さんから聞いて。
俺は勤めたら、絶対に三吾にバイオリンを買ってやろうと決めていた」

三吾にバイオリンを差し出す仕草。
目の前の三吾を、ただ愛おしく見つめる多喜二。
ピアノ曲が変わる。練習曲。

多喜二「三吾はバイオリンを抱いて喜んでくれた。家族もみんな喜んだ。三吾には俺が音楽の先生に頼み込んで、バイオリンを教えてもらった。
中古のバイオリンを買えなかった、父さんが、泣いた」

泣いている父親を見つめる多喜二。辛い。

多喜二「小説を愛して、正しさを知っていた父さんは、働いて働いて、俺が

勤め始めた年にほっとしたように逝ってしまった」

父をしばし思い、やがて思い切る。

多喜二「小樽の家では、父さんと母さん、姉さんと俺と、妹のツギと幸（ゆき）と弟の三吾と暮らしていたけど、姉さんは嫁に行き、父さんは死んで。五人暮らしになった。

仲のいい、楽しい家族だった！

同じ部屋で三吾が毎日毎日熱心にバイオリンを弾くのが、俺が小説を書く邪魔じゃないかと母さんは心配したようだが。

邪魔に思ったことなんか、ただの一度もない。

（自慢げに）俺は銀行に勤めに出る前、朝、三吾の代わりに売り物の餅をついた。だってバイオリンを弾く指だ。餅をつくのは指に負担がかかる。

三吾のバイオリンを、俺は大事に大事に聴いた。

三吾の奏でるバイオリンの音の傍らで、小説を書く。

それは本当に幸せだった」

ピアノ曲を変える。

うっとりと、三吾のバイオリンに耳を傾ける多喜二。

はたと、話を変えるように顔を上げて。

多喜二「音楽を愛し、文学を書いて。そして俺はどの道を通っても、必ず出会った人がいる」

顔を上げて、初めて愛する人田口タキに出会った、一目惚れをした瞬間の多喜二。

多喜二「（滑稽なほど大仰に恋を表現）どの道を通っても俺は……この、とても、とてもとてもとても愛らしく可憐なタキちゃんに出会って、タキちゃんに恋をしただろう！」

その取り乱したさまに自分で気づいて、咳を一つして恥じ入り背を正す。

多喜二「（表情に陰り）……入舟町の山木屋で、酌婦をしていたタキちゃんに、俺は出会った」

ゆっくりと上段に上がり、多喜二から、青年へ。

青年「小樽高等商業学校、今でいうところの大学を卒業して北海道拓殖銀行に就職した、二十一歳の年。多喜二はまだ十七歳の、田口瀧子と出会った。タキは、九人家族を食わせるためにたった十五で室蘭の店に売られた。十五で娼婦になったのだ。

日雇いをして、働いても働いても食えない暮らしに疲れたタキの父親は、ある日ぼんやりと踏切に立ち尽くし、汽車に轢かれて死んでしまった。

いよいよ家族は立ち行かなくなり、タキは更に入舟町の山木屋に売られた。当時はそうした人身売買が、ごく普通に行われていた。

その頃既に、多喜二はフランスの作家アンリ・バルビュスに影響を受けて、友人達と同人『クラルテ』を創刊していた。クラルテとは、光明という意味だ。バルビュスの小説のタイトルであり、クラルテ運動とは反戦運動を意味していた。

多喜二の心は広く社会に向かい始めて、身を売らなければならない酌婦を知ろうとした山木屋で、その酌婦に恋を、してしまった」

階段を駆け下りて、恋をした多喜二の高揚。

多喜二「……酌婦を知ろうとした山木屋。うん。何しろ二十一世紀にはプロレタリア文学の旗手と言われているらしきこの俺だ。だから山木屋には取材に言ったと、母さんにも言っている。

（快活に）だがそれは、嘘だ！

美人がいると評判なので、その美人を山木屋に見に行ったのだ。そうしたらそこには、本当に美人がいた。タキちゃんは言葉にしがたいくらい美しくて、俺は一目で心を射貫かれた！」

おどけた様子から、少し落ちついて静かに。

多喜二「その上、タキちゃんはやさしいいい子だった。

たくさんの本を読み、クラルテ主義への傾倒を語っていた俺は、まっすぐ酌婦に入れあげたとはなかなか言い難かった。

だがちゃんとものの道理が見えている者なら、淫売宿の淫売に入れあげてなどと言わない。少なくとも俺の知る者は、タキちゃんを愛した俺をそんな風に言わなかった。

誰も好き好んで、酌婦にならない。家族を食わせるため、借金を背負わされ

て、何一つわからない子どものまま売られてくる。長生きも、しない。
（多喜二の絶望）そうだ。タキちゃんは、売られてきて……そしてたった十五で、毎晩、男に体を売らなくてはならなかった。そんな地獄にいてタキちゃんは、それでも本当にきれいだった。心がきれいなままでいた。だからなおタキちゃんにそこは地獄だ。
俺は店に行っても絶対にタキちゃんには触らずに、タキちゃんが少しでも救われるように話をして、そして手紙を書いた」

椅子に座り、机に向かう多喜二。
手紙を書き、書き上げた様子。
立ち上がり、手紙を掲げる。

多喜二「（タキへの手紙を読み上げる多喜二）
『田口タキ様
「闇があるから光がある」
そして闇から出てきた人こそ、一番ほんとうの光のありがたさがわかるんだ。
世の中は幸福ばかりで満ちているものではないんだ。不幸というのが片方にあるから、幸福ってものがある。そこを忘れないでくれ。
タキちゃんたちはイヤな生活をしている。
僕は学校を出てからまだ二年にしかならない。だから金も別にない。タキちゃんを一日も早く出してやりたいと思っても、ただそれは思うだけのことでしかないんだ。これはこの前の晩お話しした通りだ。
しかし僕は強い愛をもっている。安心してくれ。頼りないことだけれども、いつかこの愛で完全にタキちゃんを救ってみせる。タキちゃんも悲しいこと、苦しいことがあったら、その度に僕のこの愛のことを思って、我慢し、苦しみ、悲しみに打ち勝ってくれ。』」

手紙を降ろす仕草。

多喜二「（情けなく、辛い）……僕のこの愛のことを思って、我慢し、苦しみ、悲しみに打ち勝ってくれ。
何を言ってるんだ俺は。我慢できるものか。まだ何も……何もわからないタキちゃんが、毎晩、毎晩……我慢できるものか！
救い出せないで、何が愛だ！
俺も……俺も耐えられはしない。愛する人が、毎夜、金を払う男の寝床に入るのをただ黙って。じっとして。

クラルテ、光明といって小説を書いても、女の子一人救えやしない」

母に歩み寄る多喜二。

多喜二「母さん！」

意を決して、息を呑んで母に。

多喜二「母さん。年末賞与と、それでは足りないから借金をして、救い出したい女の子がいるんだ」

驚いている母を、待つ多喜二。

多喜二「十五歳で売られた、田口瀧子さんという娘さんだ。身請けしてやりたい。どうだろうか」

母の返事を待つ多喜二。

多喜二「ありがとう……母さん、ありがとう」

理解してくれた母。

多喜二「(客席へ) 母さんは、字も読めなかったが、生まれつき正しさの方角を知っている人だった。自分が子どもの頃、百姓の娘達はまだ子どものうちに女郎屋へ売られて、そのまま大人になることなかった。自分は嫁にいけただけ生き延びられたと、タキちゃんの身の上に涙を流してくれた」

母に向き直る。

多喜二「いや、俺はタキちゃんを嫁にはもらわないよ。
(驚いた母親に、逆に驚いて跳びすさるようにして)
だって、お金でタキちゃんを身請けして俺の嫁にしたら、それは毎晩タキちゃんを買っている男達のすることと同じじゃないか。俺はただタキちゃんを自由にしてやりたいんだ」

諭して母の理解を待つ。

多喜二「(客席に、大仰に、コミカルに)
母さんは俺の死後しばらくして、なんでもかんでも喋ってくれた！
死人に口なし。勘弁してくれ。恥ずかしいよ俺は。
三浦綾子先生って人には、こんな話をしてくれた。
妹のチマが、腐れたリンゴが買えなくてずっと見つめている赤ん坊を抱えた貧しい女を見て、新鮮なリンゴを買ってあげたかったと母さんに言ったことがあった。母さんはそんなチマをやさしい子だと言ったけれど、俺はチマに言った。
(チマに、まっすぐな言葉)チマ、その人にリンゴを買ってあげたらいっときその人はリンゴが食べられるかもしれない。だがそれじゃあなんの解決にもならないんだ。世の中にはそういう、腐れたリンゴ一つ買えない貧しい人が五万といる。だがほんの一握りの人間が、その貧しい人達が搾取して大いに潤ってる。そういう社会を変えて、貧しい人のいない世の中を俺たちは作らなきゃならないんだ」

その言葉は真摯だが、頭を掻いて客席に向き直る。

多喜二「だから俺がタキちゃんを身請けして救い出すと言ったとき、チマはこっそり母さんに言ったそうだ。
その人一人助けても、何千何万ってお女郎さんは助からないんじゃないの？
って」

恥じ入る多喜二。

多喜二「いくら俺が早死にしたからって、なんでも喋ってくれるな母さん！
恥ずかしいだろ！
(恥じて、照れて)許せチマ。おまえに偉そうに説教をしたのに、兄が悪かった。
タキちゃんは。
かわいかったんだ。
きれいだった。
(真摯に)俺はただ、タキちゃんがただ好きだったんだよ」

タキを身請けして、手を引く様子の多喜二。
だがそこにいるタキに、触れようとして手を引き、握りしめ、タキには触

れられない。

多喜二「大金をなんとか工面して、俺はタキちゃんを救い出した。
大好きな子だから、苦しめたくなかったし、どうしたらいいのかわからなかった。タキちゃんのために別に家を借りたが、またタキちゃんが義理の父親に売られそうになったので実家に引き取った。
きれいな嫁さんがきたと、母さんも妹たちも三吾も喜んでくれたんだが」

恥じて、言葉に詰まる多喜二。

多喜二「だって、わからないじゃないか。俺が大金を用意して身請けしたから、タキちゃんは嫌だったとしても俺に何か言われたらうんって言わなきゃいけないじゃないか。好きな子にそんな思いをさせるのは嫌だ。
（滑稽な力説）だから、タキちゃんとはちゃんと気持ちが通い合って、タキちゃんがたくさん学んで、俺と一緒になるってタキちゃんの自立した意思で判断できたら結婚しようと、俺はタキちゃんにたくさんたくさん勉強を教えた！」

客席から声が聞こえたというように、客席を見る。

多喜二「え？　とんだ朴念仁だ？」

不満そうにふて腐れる。

多喜二「家は狭く、タキちゃんの部屋に行くのも家族の手前恥ずかしかったが、銀行から帰って俺はタキちゃんに色々教えた。
それも母さんが全部喋った！　ひどいぞ母さん！」

上段に上がって、多喜二から青年へ。

青年「多喜二の母、小林セキの話は、三浦綾子、小林廣などが聞き取って書き起こしている。小説、『母』の中でセキはタキが同居していた当時を、こんな風に語っている。一人でタキが寝ている部屋に多喜二が上がって行くとセキは今日こそはと、どぎまぎしたが、
（「母」の朗読）
『「あれま、多喜二はタキちゃんば、どうするつもりだべ」

けど、二階から聞こえてくる声は、
「今日は海が静かでいいなあ」
とか、
「この海つづきに、なんていう国があるか知ってるか」
とか、
「この間教えてやった、啄木の詩暗記したか」
なんていう話ばかり聞こえてくるの。なんだかわたしは、タキちゃんが気の毒な気がしてね。』

頭を抱える青年。

青年「セキさん、それは、なんだかではなく本当にタキさんが気の毒です」

下段に降りて、青年から多喜二に。

多喜二「(むきになって言い訳)だってな、タキちゃんはなんにも知らないで売られて、ただ酌婦をしていたんだ。タキちゃんには学びたい心があった。だから今まで学べなかった分、俺はたくさんタキちゃんに教えたかった！トーマス・ハーディのことも説明した。
(演説風に、滑稽に)ハーディの小説は、重大な問題を指示している。というのは芸術はただ単に、人間にいい気持ちを与えるものではなくて、人間の行動に絶大な刺激を与えるものであるということを明らかにしたものである！」

勢い込んで、タキの返事を待つ。

多喜二「(真顔だがコミカル)簡単に説明したつもりだが、何かわからないことがあったらなんでも聞いてくれ」

タキからの返事はない。この辺りは多喜二の朴念仁振りで、滑稽に、観客を笑わせる。

多喜二「(返事がないのを悲しんで)……じゃあ、音楽を楽しもう。クラシックだ。きれいだろう？　そうだ、みんなで歌いに行こうか？
(タキが喜んでくれると信じて)近所にタキちゃんと同い年のお嬢さんがいて、ピアノが弾けるんだ！

三吾も一緒に行って、バイオリンを弾いてくれ。ツギも幸も行こう！
一緒に歌おう、タキちゃん」

多喜二・『荒城の月』を歌唱。

歌い終えて、タキがいないことに気づいて、周囲を必死で見る多喜二。

多喜二「タキちゃん？　タキちゃん？　……タキちゃん！　何処に行ってしまったんだ!!　タキちゃん！」

タキを探し回り、見つからず、やがて膝をつく多喜二。

多喜二「（タキの置き手紙に気づいて読む）わたしがいては、多喜二さんの足手まといになってしまいます。絶対にもう堕落の道は歩みません。多喜二さん、立派な小説家になってください」

タキの言葉を噛み締める、多喜二。

多喜二「立派な小説家になってください」

長くタキを惜しみ、立ち上がり上段へ。青年に。

青年「タキはわずか数ヶ月で、堕落の道は歩みませんと書き置きして、小林家を出て行った。
大金で身請けされたものの手も触れられず、求婚もされず、そんな中実家では妹がまた売られようとしていたが、何者でもない立場でこれ以上多喜二に金のことを言えずに出て行ったとも。
女郎であった自分が汚れているので多喜二は自分に触れず、なのに取材として遊郭に行ったことが耐えられずに出て行ったとも、言われている。
実際多喜二は、悩み過ぎていたのだろう。大金で救い出したタキを、愛し過ぎて、悩み、気持ちを扮らせていたのかもしれない。
一週間後に、病院で働いて自立しているタキを見つけて、多喜二は心から喜ぶ。自分が教えた学びが生きたのだと、無邪気に喜び、時折タキと会い、活動写真を見たり本の話をしたりと、また、タキに学びを与えようとした。
（改まって、静かに）しかしもしかしたらそれは、タキには大きな重荷だったのかもしれない。

多喜二はタキを想い過ぎて、大切にし過ぎた。触れもせず。
やがてタキは多喜二から逃れるかのように小樽から姿を消してしまい、二年、行方がわからなくなった」

下段に降りて、青年から多喜二に。
多喜二は怒りに満ちている。

多喜二「人はみな、同じだ。平等だ」

それは自分への怒りだ。

多喜二「俺は、タキちゃんと自分は全く同じに学べるとおごったんだ。タキちゃんはもしかしたら俺の言葉が一つもわからず絶望して、また身を売ってしまったのかもしれない」

ピアノ曲、「荒城の月」が静かに流れる。
隣の娘のピアノで、一緒に歌おうとしたときのことを思い出す。

多喜二「……あの子のピアノで、三吾のバイオリンで、みんなで歌ったとき、タキちゃんは歌えなかった。歌を知らなかった。ピアノもバイオリンも知らなかった。ここは自分の場所じゃないと泣きそうな顔で笑っていた。
俺は馬鹿だ。
同じの意味がわかっていない。まだわからない！
こんなんじゃ誰一人助けられない！」

椅子に座り、机で本を必死で捲る多喜二。

多喜二「チマの……言う通りだ。一人の女郎を救っても、一人の母親にリンゴをやっても、何も変わらない。みんなを助けないと駄目なんだ。どの子どもも体を売らなくていい、どの母親の飢えなくていい、そういう世界にしないといけないんだ」

必死に本を読む。

多喜二「一体、どうやって……。
『マルクス、十二講』。社会を認識するためにはある程度マルクスを理解しな

ければならない。作家も。
……立派な小説家になってくださいと、タキちゃんは言った。
作家だから、マルクスを読まなくては。『資本論』も……いや、だが俺は社会主義者にはなれぬ。銀行員だからじゃない。根本的なところで疑いを持っている。
だが、だが……」

迷いながら、読んでいた「資本論」から顔を上げて、社会を見渡す多喜二。
ゆっくりと、社会を見つめる。

多喜二「また、家族を食わせるために子どもが売られた。売られた子どもはほとんどが大人にならずに死ぬ。
劣悪な労働環境の改善を求めて炭鉱で労働争議が起きたが、火事で炭鉱夫が百人以上死んだ。
大日本帝国政府、第一次山東出兵を決定。関東軍に出動命令。
一体何が、始まっている？
今は、命の重さは同じじゃない。
俺とタキちゃんは同じじゃない。
こんなんじゃタキちゃんを助けられない！
どうしたらいい。
どうしたら、こんな世の中が変えられる」

取り憑かれたように、マルクス主義に傾倒していく様子。

上段に戻り、多喜二から青年へ。

青年「全ての人が救われる道は、この労働者が搾取されるばかりの社会ではマルクス主義なのだと、タキの失踪後、多喜二はその学びに没頭した。
そして『雪の夜』を書いた。
（「雪の夜」朗読）
「いつから？……」
「十五から」
「十五？――」（朗読一旦終わり）
（説明として）女郎のことを、タキと同じ酌婦のことを、多喜二は書いた。
（朗読再開）
「……私の家は貧乏だったの。弟妹がまだ四人もいるんだもの。それでさ。

……でも、そうねえ、やはり、こうやって、白粉をつけたりしてみ――た――かったの、ねえ、そんなところもあったの」

「初めての時はどうだった。恐ろしくなかったか？」

「そうねえ……」女は独りで酒をついで飲んだ。「でも、変ねえ、そんなこと、いちいち、なんだか私話すのイヤになった」（「雪の夜」朗読終了）

また、労働者、いや、土方たちの命の軽さを描いた。

（「人を殺す犬」朗読）

「人を殺す犬」

捕まった、皆そう思い立ち止まって、振り返ってみた。源吉だった。

源吉はズブ濡れの身体をすっかりロープで縛られていた。そしてその綱の端が棒頭の乗っている馬につながれていた。

体を悪くしていた源吉は死ぬ前にどうしても、青森に残してきた母親に一度会いたいとよくそう言っていた。二十三だった。源吉が、二日前の雨ですっかり濁って、渦を巻いて流れていた十勝川に、板一枚もって飛びこんだということはあとで皆んなに分った。

「よオし、初めるぞ。さあ皆んな見てろ、どんなことになるか！」

親分は浴衣の裾をまくり上げると源吉を蹴った。「立て！」

棒頭が土佐犬を離した。

犬は一と飛びに源吉に食いついた。源吉と犬はもつれあって、二、三回土の上をのたうった。犬が離れた。口のまわりに血がついていた。そして犬は親分のまわりを、身体をはねらしながら二、三回まわった。源吉は倒れたままちょっとの間ピクッピクッと動いていた。がフラフラと立ち上った。と土佐犬は吠えもせず飛びかかった。犬は勝ち誇ったように一吠え吠えると、瞬間、源吉は分けの分らないことを口早に言ったか、と思うと、

「怖かない！　オッ母ッ！」と叫んだ。

その晩棒頭が一人つき添って土方二人が源吉の死骸をかついで山へ行った。穴をほってうずめた。（「人を殺す犬」朗読終わり）

（進行朗読に戻る）こうして多喜二が世の広い裾野を描き始めるのとほとんど同時に、第一回普通選挙が行われた。それまで国税三円を納めなければ得られなかった不平等な選挙権が、二十五歳以上の全て男子に与えられた。

だが、普通選挙が成立すると引き替えに、思想の自由を取り締まる治安維持法が強化された。

この普通選挙が行われた年には、その行為が国の体制を脅かすと当局が見なせば、本人の意図に関わらず検挙できる「目的遂行罪」が加わった。

六月には、緊急勅令を行使する強引さで最高刑が死刑にまで引き上げられる。

太平洋戦争を目前に控えた一九四一年には、国家の方針に従わないという理由だけで取り締まれるようになり、刑罰も更に重くなっていった。
やがて多喜二を追い詰めていく治安維持法と、それを行使する特別高等警察、特高は、太平洋戦争に日本が敗ける十七年後まで存在した。
逮捕者は数十万人、七万人以上が送検され、拷問や虐殺、獄中での病死者は千人以上に上ったと言われている」

下段に降りて、青年から多喜二に。

多喜二「まず、普通選挙だ。誰でも一票を投じられるごく当たり前の選挙だ。北海道では労働農民党から日本共産党の山本懸蔵（やまもとけいぞう）が立候補した！　落選したが労働者を奮い立たせる演説を多くの人が聞いた！
……多くの人が労働者よ立ち上がれという叫びを聞き、実際立ち上がった。それを叫ぶ八人が当選したことを政府は恐れて、三月十五日、数千人という共産党員が検束された。
刑務所に収監された三十名は、無惨な拷問を、受けた」

呆然とする多喜二。

多喜二「何故だ。当たり前のことを、望んでいるだけだ。働いただけ、みんなが食える。働けなくても、殺されない。食えないからといって、子どもを女郎屋に売って死なせなくても済む。みんなが学べる。そういう普通の暮らしを望んでいるだけだ。
俺はタキちゃんを、ちゃんと幸せにしたいだけなんだ」

机につき、ペンを取る多喜二。

多喜二「書くことしか、俺にはできない。書こう。書かなくては」

鬼気迫る執筆。
やがて上段に上がり、多喜二から青年へ。

青年「多喜二は、プロレタリア文学、芸術運動の組織である全日本無産者芸術連盟NAPF（ナップ）の小樽支部を組織し、その機関誌『戦旗』に、仲間達も検挙されたこの三・一五事件を克明に小説として描いた。
多喜二が書いた『一九二八年三月十五日』は、多喜二をプロレタリア文学の

旗手として大きく歩き出させた。
（一九二八年三月十五日」朗読・「×」については全て「バツ」と読む）
遠くで剣術をやっているような竹刀の音が彼の耳に入ってきた。それだけでなしに、そしてその合間に何か肉声らしい音も交ってきこえた。
「ホラ、ホラ……ホラ、なあ。」その音が高まる度に、不良少年がそう注意した。
「何んだろう。」佐多も声をひそめて、彼にきいた。
「××さ。」
「……？」いきなり咽喉へ鉄棒が入ったと思った。
「いいか、ホラ、ホラ、あれア××××××奴のしぼり上げる××。なあ。」
佐多には、それが何んといっているかわらなかったが、一度きいたら、心にそのまま泌み込んで、きっと一生忘れる事が出來ないやうな×××××××だった。「歯の根」がどうしても合はなかった。
「分る、分るよ！　な、×せ――え（作者注釈・「殺せ」と推測）、×せ――えツて、云ってるらしい。」（朗読終わり）
（説明に戻る）特高による拷問を克明に描いたこの小説は、肝心な部分は「バツ」で伏せられ、大量に文章を削除されて出版された。このとき拷問を受ける者の悲鳴を聞いている「佐多」という男は、多喜二だと言われている。
多喜二自身は、佐多と同じに、いわゆる労働者ではなかった。多喜二はこの頃拓殖銀行の行員で、給料は九十六円。普通の労働者の二倍だ。母と、弟妹、一家の大黒柱となって働こうと選んだ就職先だった。黙っていればそれなりの暮らしができた。
それでも多喜二は、沈黙することができなかった。
（静かに語る）この拷問の描写が、特高の多喜二への強い憎悪を、抱かせた」

特高の多喜二への憎悪がどんな結末に繋がったか、それを思う沈黙。
やがて顔を上げて。

青年「同じ年に多喜二は、『蟹工船』を書き始めた。
「おい地獄さ行ぐんだで！」
その言葉で始まる『蟹工船』は、考える力を奪われる程酷使される、漁船の上の漁夫たちの群像劇だ。監督に折檻され働いて働いて死ねば、麻袋に詰められて海に捨てられる。
だが漁夫達は気づく。
自分たちは人間だと気づいて、立ち上がる。ただ人間であることを求めて、ストライキに突入する。

そこに帝国海軍の軍艦が現れる。漁夫達は勝利だと……誤解する。
国の軍艦はストライキの先導者九人を、あっけなく捕らえて、ストライキは一枚の新聞紙を燃やすより容易く蹴散らされた。
この作品の中で、献上品の缶詰に石でも詰めて置けと書いたことで、多喜二は不敬罪に問われることになる」

下段に降りて、青年から多喜二へ。
机につく。
最後の一文を書くために、じっとして集中する多喜二。

多喜二『そして、彼等は、立ち上った。――もう一度！』

それが「蟹工船」の、最後の一文。
書き上げたと、原稿用紙を高らかに掲げて。

多喜二「書き上げた。書き上げたぞ！　『蟹工船』を！」

感慨の中立ち上がって、ふと、全く別の方向にタキを見つける。

多喜二「(二年ぶりのタキとの再会に、無邪気に高揚する)……タキちゃん！」

タキに向かって一歩駆け寄り、しかし自制して足を止める。
言葉が出て来ない。
嬉しいけれど、駆け寄って抱きしめられるような多喜二ではない。
なんと言おうか迷って、大きく手を振る。

多喜二「おおい、タキちゃん！　ちゃんと勉強してるか！」

笑って手を振って、やがて自分の言葉に落胆して、手を降ろし肩を落として頭を抱える。

多喜二「二年ぶりにタキちゃんに会えたのに……なんだって俺は。
(客席に向かって、コミカルに)
このときのことも母さんは、思いっきり喋ってくれた！
『わたしはね、うちの多喜二も言うに事欠いて、「勉強してるのか」なんてなんでそんなことしか言えんかったんだべかって。呆れたり、感心したりした

もんだ。多喜二のすることはすっかりなんでも信頼していたけど、わたしは学がないからなのか、時々多喜二のことはさっぱりわかりませんでした』」

母の言葉に絶望する多喜二。

多喜二「(俯いて、まだコミカルに) ……母さん、それは全く呆れてくれてかまわないし、俺のことが時々わからないのは母さんに学がないこととは全く関係ない」

落ち込み、また顔を上げる。

多喜二「(恋の、素直な高揚) タキちゃんを目の前にすると、俺は考え過ぎてしまうんだ。だって俺にはタキちゃんは世界で、だから世界は全部タキちゃんだ。だから俺は世界を全部助けたい。救いたい。全部タキちゃんなんだから。

そんなにタキちゃんがかわいらしくて大好きだから、それで俺は上がってしまうんだ！

……この時俺はもう、二十六であったがそれがどうした」

タキへの想いを噛み締め、そして現実へ。

多喜二「タキちゃんとはまた、手紙を交わしたり、たまに会ったりと交際を始められた。再会に俺は舞い上がった。タキちゃんも……同じ気持ちでいてくれたらいいなあ。

以前のようにあまり浮かれたことを手紙に書かないように気をつけたい。タキちゃんがどう思うかわからない。

(客席に、おどけて) タキちゃんを身請けする前俺は、『たった一人のタキちゃんへ』、『たった一人の愛しいタキちゃんへ』、『僕のスウィート・ハートタキちゃんへ』、と書き綴り……。

(絶望) なんとその手紙は全部本になって後の世に残っているらしい……。

今度は気をつけよう！

(真面目に、深刻に) それに、俺はタキちゃんと再会した五月にはもう、『蟹工船』の件で警察に引っ張られていた。十一月には、地主のことを書いて銀行をクビになった。

タキちゃんと一緒になりたかったが、俺の身の上は不安定過ぎた。それでもタキちゃんは俺に寄り添ってくれて、温泉宿に小包を送ってくれたりしたん

だ！」

机につき、タキからの手紙を小包みを開け、素直に歓喜する多喜二。

タキに手紙を書く。

多喜二「(明るく手紙を書き、それを読む)

今タキちゃんから贈られた万年筆で、タキちゃんから贈られたドロップスを舐めながら、小説の一段落をつけて、この手紙を書いている。まるで僕の小説がタキちゃんのもので全部出来上がることを感じ、なんとも言われない気持ちでいる」

ドロップスを舐めて、心からタキを思い、浮かれる多喜二。

多喜二「で、タキちゃんがこういうところで、あまりその尊いお金を使ってもらいたくないのだ。ケチンボーになってください。では、また書きます。体を気をつけて、なるべく本を読むように。では、タキちゃんへ」

軽快に手紙を書き終えて、不意に、沈み込む多喜二。

多喜二「……結局また書いてしまった。せっかく俺のために万年筆やドロップスを買ってくれたのに、ケチンボーになってくださいとか。本を読むようにとか」

考え込み、苦笑。

多喜二「だが俺は、信じているんだよ。タキちゃん。いろんなことを知ることが、タキちゃんをきっと守ってくれるって。信じているんだよ、タキちゃん。こうして俺が小説を書くことが、きっとタキちゃんを幸せにするって。信じているんだ。

立派な小説家になってくださいって、タキちゃん、そう言ってくれたよな」

照れて、手紙を終えて立ち上がる。

多喜二「銀行をクビになり、作家に専心して小説に打ち込み、いいこともあった。なんと『蟹工船』が、帝国劇場で上演された！

『蟹工船』の上演は大好評だった！　しかしすっかり目立って、ますます特

高警察に目をつけられてしまった。帝国劇場は欧風建築で、歌舞伎やオペラ、シェイクスピア。ラ・ミゼラブルやオペラ座の怪人の活動写真も上映されていた（楽しい、いい報告）。
だが関東大震災で、帝国劇場は燃えてしまった。そしてすぐ戦争が始まる……オペラもシェイクスピアも、活動写真も敵性文化はみんな禁止だろうな」

ため息を吐いて、笑う。

多喜二「（大きく笑って、明るく）日本人役者でのラ・ミゼラブル！　そんなもんが上演されたりしてな！　どんな国の文化も芸術も、平らかにたくさんの人が楽しめる未来。そんな未来がくるといいなあ。
（ゆっくりと、静かに）俺はそういう、当たり前のためにただがんばってる。そういう当たり前の人の暮らしが……来るといい」

心からそれを願う多喜二。

多喜二「（静かに、真摯に、まっすぐ前を向いて）そんな未来が、来るといいなあ」

上段に上がって、多喜二から青年へ。

青年「現在の帝国劇場は、様々な国の文化や芸術が自由に上演されている。
多喜二の望んだ、多喜二の観たかった光景が、舞台の上には広がっている。
帝国劇場で上演された『蟹工船』は、一万五千部も売れた。それだけ人々は多喜二の言葉を求め、それだけ多喜二の言葉は、労働者に影響した。
軍国主義に向かっている大日本帝国が、それをありがたがるわけもなく、多喜二は小樽を出て二十七歳の三月に、東京の中野に移り住んだ。
四月、たった三週間、初めてタキと二人きりで暮らした。
二十一歳でタキと出会い、一目で愛して、ただ愛し続けた多喜二が、タキと暮らした時間はその三週間。
それはいったい、どんな三週間だったのか」

ピアノ曲。ブラームスなど。穏やかに幸いを思わせる曲。

青年「五月、タキは理容学校の寮に入り、多喜二は警察に検挙される。
多喜二をひたすらに追い詰めた治安維持法は、国体を変革する思想への弾圧

だった。
国体とは、神聖不可侵、唯一絶対の天皇制のことであり、人一人一人の権利を認めないものだ。
多喜二に掛けられた嫌疑は、日本共産党への資金提供だった。
当時の共産党は、現在の日本共産党とは大きく異なり、天皇制そのものを否定していた。何故なら大日本帝国の軍隊は天皇の軍隊という前提であり、日本は既に日清、日露と戦争を繰り返し、満州を足場に今また太平洋戦争への歩みを確実に進めていた。
八月、多喜二は刑務所に収監され、獄中から多くの手紙を残している」

下段に降りて、青年から多喜二へ。
机について、手紙を書く。

多喜二「田口タキ様。
あのウニは、中野での短かったが、恐らく一番楽しかった生活の日のことを思い出さして、涙がこぼれました。金はタキちゃんには大切なものですから、僕の方には入れないでください」

手紙を書く手を止めて、考え込む。

多喜二「また……書いてしまった。タキちゃん。ごめん。きっとタキちゃんが欲しい言葉は、もっと簡単な言葉なんだと俺は本当はわかってるんだ」

タキが愛おしく、微笑む。

多喜二「だが、俺は嘘は言えないんだよ。ごめんな。タキちゃん。
原まさ様。
小樽から出てきた弟を、橋本さんとか言う人に見てもらってはいただけませんでしょうか。私の大それた考えでは、弟をシェフルブラードにつけたいのです。
（客席に）シェフルブラードというのは、新交響楽団のコンサートマスターだ。兄バカじゃないんだ。三吾のバイオリンは本物だ。俺は三吾のバイオリンが本当に大切なんだ。獄中から俺は何度も、三吾のバイオリンの教師についてうるさくうるさく手紙を書いて、三吾にも東京で学ぶようにしつこくしつこく手紙を書いた。だって三吾のバイオリンは本当に美しいんだ」

ふと、音楽を思う。ピアノ曲が流れて、それに聴き入る多喜二。

多喜二「……三吾のバイオリンが、聞きたいなあ。刑務所にはない贅沢だ。三吾が、面会に来てくれて……母さんの話を聞かせてくれた。とても、言い難そうに。
母さんには、俺が刑務所に入れられたことは言わないで置いたのだが」

無理に、明るく顔を上げて。
椅子から立ち上がる。

多喜二「俺は西瓜が大好きで。八月は、お盆だ。俺が帰ってくると信じて、心待ちにして、母さんは特別にでっかい西瓜をしまって置いてくれたんだそうだ。毎日、その西瓜は悪くなっていって、それでも母さんは『いや明日は多喜二は帰る』『明日は帰る』と、西瓜をしまって俺を待ち続けていて。
それがかわいそうで、三吾はとうとう、俺が帰れないことを教えたそうだ。
母さんはただ真っ青になって声も出なかったと、三吾は言っていた。
俺は、本当に親不孝だ」

母を思い、俯く多喜二。

多喜二「……タキちゃんは、手紙を読んでくれているんだろうか。書いても書いても、返事が来ない。
返事が来ないもんで、俺は手紙や差し入れをくれる他の女のことを、当てつけがましく手紙に書いてしまった。
意地悪な気持ちもたくさんあった。ごめんタキちゃん。ごめんな。
それと、焦りも、あった」

ふと、その焦りについて考え込む。

多喜二「なんの焦りだろう。
編集者や活動家の女達は皆、本をよく読み、ものを知って、弁が立った。
とても強く見えて、何処かに一人でいるタキちゃんは、想像の中でどんどん弱々しくなって行った。何もわからないままでいたらまた、タキちゃんは身を売るしかないのではないかと……俺はそれが、何より怖くてたまらなかった」

タキを思い、タキの身の上が何よりも心配。

多喜二「怖くて、たまらなかったんだ」

俯く多喜二。

長い間を置いて、明るく顔を上げる。

多喜二「(明るく)十月、タキちゃんが面会に着てくれた。タキちゃんに会えた！　ただ嬉しい。ただただ嬉しい！」

また手紙を書く多喜二。

多喜二「(手紙を読み上げる)

田口タキ様。

面会に来てくれたことは何より嬉しかった。充分に、太陽の光を顔に吸い込ませることのできた、幸福な顔だと思った。あの明るい、秋の澄んだ太陽の下を歩いてきた人を見ることは、ぼくにとっては、何より嬉しく、そして幸福なことだ。

(調子を変えて、言い難そうにコミカルに)……髪には、ウェーブをしてあるのを発見して、ヒョイと、驚いた。自分でしたのか知らないが僕の考えを言うと、(咳払い)タキちゃんは、もっと髪を自然のままにしておくことの方が、顔としっくりくるのではないかと思った。(もう一度咳払い)しかし、これは、なんにもわからない素人の言うことだから、気にする必要はあるまい！それに、また、こんなことを言うこと自体が、第一僕らしくないからやめる」

全部読んでから、自己嫌悪。

多喜二「なら最初からやめておけ多喜二！

(ため息)やれやれ……どう頑張っても、俺もまた古くさい男なのか。いや、タキちゃんは本当に自然のままが一番かわいいんだ」

獄中、見えない空を見上げて、高らかに。

多喜二「高山絹子様。

柿のお差し入れを心から頂戴しました。

ぼくはそれを机の上に並べ、よくそれを見、それからゆっくりと歯で皮をむ

き、それからゆっくりとかじりついて、なるべくゆっくりお腹の中へ落としてやりました。
するとそれが実にとっくりと自分のものにおさまるように思われるからです。
そしてぼくはそれを食べながら色々外の生活、あなたたちのことを深い感動をもって考えることにしています。
ここから青く澄んだ秋が見えます。
扇形に開いたコンクリートの運動場の壁に、ここでは寒々とした濃い影が輪郭をはっきりと落とすようになりました。水も冷えてきました。
ぼくが残して来た北の国にいる年老いた母は、この上もなく厚い巾の広いゴツゴツとした掛け布団を送ってくれました。
雑役の人はそれを運んで来てくれて、こんなことを言いました。
『こんな親不孝者にも、親ってこんな厚い布団を送ってくれるものかな』
差し入れになる着物を見ると、そのたもとに、高野山のお守りが入っているのです。
北の国も冬でしょう。毎日雪まじりの雨が降っていることと思っています。
ここはしかし厚いコンクリートなので、今年の冬をぼくは案外心地よく暮らせるのではないかと思っています。
飛行機が毎日飛んでいる。
ぼくはその度にまるで子どものようにムキになって窓の下に駆け寄ります。
ぼくは元気です。
ぼくは青空をにらみ返しながら本を読んでいます」

ふと弱くなって、手元のお守りを見つめる多喜二。

多喜二『こんな親不孝者にも、親ってこんな厚い布団を送ってくれるものかな』……母さん、小樽はどうだ。寒くないか。
でもその寒さが、懐かしいよ。恋しいよ。
母さん」

小樽を思い、遠く、監獄から空の向こうを見る多喜二。

多喜二「(小樽を思いながら)
村山籌子（むらやまかずこ）様。
冬が近くなると、僕はその懐かしい国のことを考えて、深い感動に捉えられている。
そこには運河と倉庫と税関と桟橋がある。

そこは、人は重っ苦しい空の下を、どれも背を曲げて歩いている。僕は何処を歩いていようが、どの人をも知っている。
赤い断層をところどころに見せている階段のように山にせり上がっている街を、僕はどんなに愛しているかわからない」

多喜二、唱歌『故郷』を歌唱。

小樽を見つめる。

多喜二「四歳から二十七歳までを、俺は小樽で暮らした。
小樽でタキちゃんと出会った。
ここを出たら、今度こそタキちゃんと結婚しよう。そして小樽に帰って、母さんとタキちゃんと仲良く暮らそう。
ごく普通の暮らしを、みんなでするんだ」

ひとときの夢を見る多喜二。
静かに立ち上がって、上段へ。
多喜二から青年へ。

青年「翌年、二十八歳の一月に刑務所を保釈出獄で出て、三月に多喜二は初めてタキに、プロポーズをした。タキを身請けしてからなんと六年目に、やっと求婚したのだ。
タキはこの求婚を、邪魔になっては悪いからと、断った。
母を郷里から呼び寄せて、弟の三吾と杉並での三人暮らしが始まるが、多喜二は神奈川県の七沢温泉で小説を書く。
この温泉で、多喜二は毎日この歌を歌ったという」

青年、・『折ればよかった』　ブラームス歌曲作品47の3を歌唱。

青年「……けれど多喜二は、決してタキを折ることはできなかった。
九月、満州事変勃発。日本はひたすらに、戦争への道を歩き始める。
多喜二はそれを止めようと必死になった。
十月、多喜二はとうとう日本共産党に入党する。
翌年三月、文化団体への大弾圧が始まる。
反戦への声を上げる者への大弾圧が始まり、逮捕を逃れた多喜二はいわゆる地下活動をするはめになる。

特高に追われながら、逃げ、隠れして、それでも多喜二は小説を書き続けた。
当たり前を求め望む、声を、上げ続けた」

下段の多喜二を見つめるように。

青年「四月、多喜二は麻布で、志を同じくする伊藤ふじ子と結婚している。
ふじ子はハウス・キーパーだったとする者もあり、彼女のことはほとんど誰
にも知られていない。母親のセキもふじ子との結婚を知らなかった。
ふじ子は退職金の全てを渡してくれたと、多喜二は泣いて友人に話したとい
う。
追われて、逃げて、明るかった多喜二は、心を弱らせて行った」

下段に降りて、青年から多喜二へ。

多喜二「……ふじ子には、かわいそうなことをした。
ふじ子は俺を愛してくれて、俺によく尽くしてくれた。
俺はずっと特高から逃げる生活で、その暮らしをひたすらに支えてくれたふ
じ子を、家族に紹介することもできなかった。
ふじ子にはただ、ただ、愛された」

机につき、小説を書く。

多喜二「『党生活者』『級長の願い』『失業貨車』『転形期の人々』『沼沢村』、
ふじ子と麻布を転々としながら、俺は次々と小説を書いて発表した。
麻布は、坂の多い街で。小樽に似て思えて、それで麻布を離れたくなかった」

疲れ切る多喜二。ふと、封筒を受け取り中から何かを取り出す仕草。

多喜二「ヨゼフ・シゲティ「Gran Violin Concert」十二月九日のチケット…
…日比谷公会堂、隣の席は、三吾に贈ったと……村山籌子さん。
（息を呑んで）いや、今日比谷公会堂に行くのは危険だ。
だが、シゲティのバイオリンを、三吾と。
三吾、もう、会えるかどうかも……」

考え、悩む多喜二。
立ち上がる。

多喜二「籌子さん、演奏会行かせていただきます。
すまない三吾、兄のわがままを許してくれ」

椅子を持って、舞台中央に歩く。
日比谷公会堂。
椅子に座る多喜二。
ただまっすぐ前を見る。
ピアノ曲。可能であれば二人が実際に聞いたベートーベンの「ヴァイオリン協奏曲」。

多喜二「……三吾、俺を見ては駄目だ」

音楽に聴き入り、多喜二は涙が止まらない。
やがて演奏会が終わる。

多喜二「(三吾を見ずに、独り言だが、笑って三吾に伝えるために明るく大声で)
さて、仕事だ。仕事！」

椅子を持って、その場を立ち去る多喜二。

多喜二「……ありがとう、籌子さん。本当に本当にありがとう」

歩き、立ち止まり、空を見上げる多喜二。

多喜二「十二月か……。
刑務所で、ディケンズを貪るように読んだ。
『クリスマス・カロル』は、よい寓話だった。世界には色んな小説があるな。
まだ読んでいない本がある。まだ書いていない物語がある。
幸せな物語も、書けたらいいなあ。
そんな時間が、あったらいいんだが」

笑う。

多喜二「昭和八年の一月に書き上げた『地区の人々』が、俺の最後の小説に

なった。
俺はその伝言を聞くことはなかったが、小説家の江口渙（えぐちかん）が、二月に特高警部の中川に言われたそうだ。
小林多喜二の野郎、潜っているくせに、あっちこっちの大雑誌に小説なんぞ書きやがって。いかにも警視庁を舐めてるじゃないか。いいか、我々は天皇陛下の警察官だ。共産党は天皇制を否定する。そんな逆賊は捕まえ次第ぶち殺してもいいことになっているんだ。小林多喜二も捕まったら最後命はないと、君から伝えておいてくれ！
……俺はその伝言を聞くことはなかった。だが何か時間がないような気がして、一目でいいから会いたい人に会うために、杉並に行ってしまった。
ごめん、ふじ子。おまえと結婚しているのに、ごめんな」

弱り切っている多喜二。
タキの部屋。
タキはいない。
タキに会いたくて、部屋を見回す。
苦笑して、立ったままペンを取り机の上で何を書こうか考える。

多喜二「田口タキ様。
久しぶりで来てみた。多分いないだろうとは思ったが」

続きに何を書こうか、長く、長く考え込む。

多喜二「（大きく笑って）じゃ元気で！　幸福で！」

書き置きを置いて、歩き出す多喜二。
立ち止まり、誰かに肩を叩かれたというように、ハッとして振り返る。

多喜二「同志のふりをして潜り込んでいた三船留吉という男と会おうとして、昭和八年の二月二十日正午、赤坂で、同志今村とともに築地警察署の特高警察に、俺は捕まった。
このとき今村に俺が、『おい、今村。こうなったらしかたない。お互い元気でやろうぜ』と悪びれることなく強気を見せたのが、余程勘に障ったようだ。
今村はこのときの拷問で片足が不自由なまま、長生きもできなかった。……悪いことをした。
中川成夫、毛利基、山県為三など、多くの特高が、寒い中俺を丸裸にして取

り調べた」

舞台、下段の真ん中に、仰向けに横たわる多喜二。

ここは台本は胸の上に置いて、暗唱する。

多喜二「三時間、拷問は続いた」

横たわったまま上を向いて、多喜二は動かない。

多喜二「江口が家に帰った俺の遺体を見て、こう書いている。
ものすごいほどに青ざめた顔は激しい苦痛の跡を印し、知っている小林の表情ではない。左のコメカミには打撲傷を中心に五、六ヶ所も傷痕があり、首には一まき、ぐるりと細引の痕がある。余程の力で絞められたらしく、くっきり深い溝になっている。だが、こんなものは、体の他の部分に較べると大したことではなかった。
下腹部から左右のヒザへかけて、前も後ろも何処もかしこも、何ともいえないほどの陰惨な色で一面に覆われている。余程多量な内出血があると見えて、股の皮膚がばっちり割れそうにふくらみ上がっている。更に赤黒い内出血は陰茎から睾丸に及び、この二つのものが異常な大きさにまで腫れ上がっていた。赤黒く膨れ上がった股の上には左右とも、釘を打ち込んだらしい穴の跡が十五、六もあって、そこだけは皮膚が破れて、下から肉がじかに顔を出している。
歯もぐらぐらになって僅かについていた。体を俯向けにすると、背中も全面的な皮下出血だ。殴る蹴るの傷の跡と皮下出血とで眼もあてられない。
しかし、最も陰惨な感じで私の眼をしめつけたのは、右の人さし指の骨折だった。人さし指を反対の方向へ曲げると、らくに手の甲の上へつくのであった。作家の彼が、指が逆になるまで折られたのだ。この拷問が、いかに残虐の限りをつくしたものであるかが想像された。
『ここまでやられては、むろん、腸も破れているでしょうし、腹の中は出血でいっぱいでしょう』と医者がいった。
警察が発表した死因は心臓麻痺で、死体解剖は全ての病院に断られた。」

動かない、多喜二。

多喜二「俺は、できるだけたくさんの人に普通の幸せをと言っているだけで、特別おかしなことをしているつもりはないんだが。

なあ、母さん。
そうだろう？
俺はおかしなことはしていないよな、母さん」

やがて限界を迎える。

多喜二「俺はもう駄目だ。
母に伝えてくれ。
頼む、母を呼んでくれ」

その望みは叶わないと知る。

多喜二「もう一度だけ、会いたかったなあ。
母さん。
本当は痛いよ、怖いよ。
俺はまだ、二十九だ。
読んでいない本がたくさんある。
書いていない小説がたくさんある。
幸せな小説が書きたかった。
愛するタキちゃんにもう一度会いたかった。
母さん。
母さん。
……母さん」

目を閉じる。
長い時間。
多喜二の死を意味する。

がばりと起き上がる

多喜二、母として「……多喜二……！」

母を表現した後、多喜二自身の冷静さに戻る。

多喜二「その夜母さんは、汗だくで目覚めたという。
俺が胸に縋り付いたと、話したそうだ。

まさしくそれは、俺なのだろう」

立ち上がり、そこに母を残したように見つめて、振り返りながら歩く多喜二。

多喜二「俺の遺体を抱いて、母さんは傷痕を撫でさすりながら『どこがせつなかった？　どこがせつなかった？』と泣いた。
そして『それ、もう一度立たねか、みんなのためもう一度立たねか！』と叫んだ。
そのとき母さんもおかしくなっていたのだろう。当たり前だ。我が子のそんな惨い姿を見て、どうして母親が正気でいられようか。
……起き上がれ多喜二みんなのために。
母さん。
俺、がんばったと思うんだ。
結構がんばった。
（ふと、本当にわからなくなる）なんのために頑張ったんだったっけ……？
少し疲れたなあ。
もう、休んでいいか？
なあ、母さん」

舞台中央に、母を見つめるまなざしの多喜二。

多喜二「母はやさしい人だった。
母は賢い人だった。
母は聡い人だった。
いや。
母は。
何処にでもいる、普通の母親だった。
ごく普通に、俺を愛してくれた母だった。
ごめん母さん。俺は本当に、親不孝だ。
でももう眠りたいんだ、母さん。許してくれよ」

多喜二、『シューベルトの子守唄』（訳詩：内藤濯）を歌唱。

多喜二「三吾は母さんが狂うのではないかと、心配したそうだ。
三吾は戦後、東京交響楽団の第一バイオリン、コンサートマスターになった。

（一転明るく、客席に）ほらな？　兄バカじゃあない。三吾には才能があった！
一九五三年にまた、ヨゼフ・シゲティが来日して、なんと三吾は一緒にあのときと同じのバイオリン協奏曲を弾いたそうだ。
涙が溢れて、三吾は楽譜が、見えなくなってしまった。
（愛おしく、三吾を見つめるように）怒るぞ三吾。
いや、俺が悪い。ごめん、三吾。ごめんな」

三吾から、気持ちを社会へ。

多喜二「俺の無惨な遺体は、新聞の一面になった。革命の旗となって、人柱になったが、八年後に太平洋戦争は始まった。
家族は非国民と蔑まれて、戦後、三吾は楽団でも俺の弟だと言えなかった。
それでも度々、俺の最期の姿、デスマスクは旗印になった。
（飄々と）まあ、何しろあれだけの目に遭って惨殺されたんだ。軍旗の一つにもならないとやってられない。（ここまでは、明るい多喜二のまま）」

軍歌を思わせるピアノ曲。
その音を振り返る。

多喜二「（段々と、沈み込むように考え込む）
……三吾は、俺が死んだあと『惨殺』という言葉を見るのも辛かったそうだ。
音楽をひたすら愛する、やさしい弟だから。辛い思いをさせた。本当にすまなかった。
軍旗は、俺がなくしたかったもののはずだ。
闘いの旗印なんか、ない方がいい。
ない方がいいんだ！　そうだろう!?」

はっきりと正面を向いて、強く世界に訴える。

多喜二「そのために俺は書いた。
そのために俺は書いた。
そのために俺は書いたんだ！
俺のことなんか、みんな忘れてくれた方がいい！　そういう世界が来た方がいい！
『蟹工船』がもてはやされる世の中なんていらない！　なんだったんだあれ

はと、焼き捨ててくれてかまわない。忘れ去ってくれてかまわない！
それが俺が望んだ世の中だ！
ごく普通の幸せをみんなが持てる世界なんだ！」

慟哭のように叫び、息を整えて、まっすぐに前を見る。

多喜二「（穏やかに、静かに、問い掛ける）その未来は、訪れているか？」

上段に上がり、多喜二から青年へ。

青年「タキはその後結婚して、なんと百二歳まで生きた。二〇〇九年、平成二十一年の六月に、老衰で亡くなった。タキの弟はタキが、『あの人おかみにたてつくから怖くて』と多喜二のことを言ったのを聞いたと、書き残している。
多喜二にドロップスを送ったのも、多喜二を怖いと言ったのも、どちらもタキだ。人一人の心にある愛や、悲しみや不安や怒りは、一つ二つですむわけがない。
まだ二十一歳の、初めて社会に出たばかりの多喜二は、置屋に売られて酌婦をしているタキに恋文を書いた。
闇があるから光があると、そう書いた」

下段に軽快に駆け下りて、青年から多喜二に。

多喜二「（明るく）すごいなタキちゃん百二歳まで？　二十一世紀まで？
戦争も終わって、幸せになって。
（おどけて）ひどいなあ。俺が怖かったって言ったのか？」

静かに、俯いて、穏やかに笑う。

多喜二「いいんだ。
そうだった、俺は。
思い出したよ。そういう普通のためにがんばったんだった。
ありがとう、タキちゃん。
幸せに長生きしてくれて、本当にありがとう。
よかった」

遠く、タキと出会った日の自分を思う。

多喜二「(手紙を読むように) 闇があるから、光がある」

顔を上げて、曇りなくまっすぐにタキを、世界を見つめる。

多喜二「タキちゃん、今君は、光の中にいるんだね」

多喜二、大きく笑う。

多喜二「小樽の冬はとても暗くて寒い。
けれど小樽にも春は来るんだ。必ず来る。
ああ……でも俺は、もう歌うことはできないんだ」

ゆっくりと客席に背を向けて、舞台後方上段を見上げる多喜二。
多喜二から青年に、歌は託される。
ゆっくりと、正面をまっすぐに向く。
小林多喜二は完全に消えている。
今ここに存在するのは、現代を生きる青年。

青年「春は必ず来る」

青年、唱歌『早春賦』を歌唱。

幕

●作中朗読
「母」　三浦綾子　角川文庫
以下全て小林多喜二
「北海道の『俊寛』」
「雪の夜」
「人を殺す犬」
「一九二八年三月十五日」
「蟹工船」

●参考文献

「定本　小林多喜二全集　全十五巻」　小林多喜二・他　新日本出版社
「小林多喜二随筆集」　小林多喜二　書物展望社
「小林多喜二の手紙」　荻野富士夫編　岩波文庫
「母の語る小林多喜二」　小林セキ　新日本出版社
「母」　三浦綾子　角川文庫
「小林多喜二とその盟友たち」　藤田廣登著　学習の友社
「治安維持法と戦争の時代」　江口圭一・木坂順一郎　岩波書店
「小林多喜二を売った男」　くらせ・みきお編　白順社
「作家小林多喜二の死」　江口渙著　書房ゴォロス

●参考映像

「いのちの記憶　小林多喜二・二十九年の人生」　北海道放送制作